第三百三十一回　青葉会

平成二十五年十月二十四日（木）　午后六時～九時
丸紅来客食堂「談話室」

〈選者〉☆川合万里子　先生（「萬緑」大会に参加されるため欠席）
〈出席者〉今井紀久男　大林猛　小川恭延　柿崎忠彦　久米五郎太　豊田ゆたか　中野一灯　山内天牛
〈投句〉伊賀山そらお　小西弘子　小早健介　朱牟田恵洲　土谷堂哉　福島正明　古田昇　宮内規雄
渡邊盛雄
〈紙上選句〉川合万里子先生　赤田堅　川口孤舟　楠田彦十　小西弘子　庄司龍平　高橋敏郎　橋口隆
早川允章　福島正明　村田くに子　山崎青史　山本三恵

《選者吟》
詩筵訪ふ颱風裡から身を躱し　万里子
雨上り鰯雲へと離陸かな　仝
空と海限る筑紫の嶺々さやか　仝
枇杷咲くや七盛塚の闇和み　仝
海峡の秋暁紅し詩の旅　仝

《互選句》
十点
☆秋の日や丸き字で書く人の情　五郎太（万・恭・忠・孤・彦・弘・敏・ゆ・く・三）
（☆→人情を綴る字丸し秋日和）
九点
☆光る海鯊釣り舟の動かざる　堂哉（万・忠・彦・五・龍・ゆ・允・天・三）
（☆→海光り鯊釣り舟の動かざり）
七点
☆雁渡る尾根に風化の遭難碑　一灯（万・孤・彦・敏・ゆ・允・正）
☆曼珠沙華よちよち歩きの目の高さ　天牛（万・猛・弘・龍・敏・灯・隆）
藤沢周平記念館
六点
☆秋高く天馬となりて志ん馬逝く　紀久男（忠・敏・ゆ・灯・允・天）
（☆→秋高し天馬となりて志ん馬逝き）
小気味よき江戸弁さらば秋の暮　忠彦（万・堅・紀・孤・隆・く）
志ん馬急逝
五点
☆出帆の子に振る母の秋日傘　一灯（万・孤・彦・允・く・三）
☆出羽の秋ばせふと共に廻りけり　五郎太（万・猛・恭・孤・正）
（☆→蕉翁の旅路を辿り出羽の秋）（芭蕉＝ばせうｏｒばせを）
☆古代史の迷路に入りぬ長き夜　昇（万・堅・隆・允・正）
（☆→古代史の迷路を辿る夜長し）
四点
☆秋夕焼塒（ねぐら）に鳥の影帰る　恭延（万・猛・五・三）
（☆→塒へと帰る鳥影秋夕焼）
☆秋深し遺句集の友は生き生きと　忠彦（万・猛・五・允）
（☆→遺句集に友は生き生き暮の秋）（清さん・和夫さんの遺句）
☆身構ふる屋根のシーサー黍嵐　一灯（万・彦・龍・青）
（☆→シーサーの身構へる屋根黍嵐）
（青…シーサーは屋根にあるものだから「屋根の」は不要でしょう。中七「シーサー厳めし」）
三点
定数をそのままにして吊し柿　正明（忠・五・弘・三）
☆旅終へて凡庸の日々菊咲けり　盛雄（万・堅・弘・正）
（☆→旅果てて菊咲く日々のただ平ら）
テナーの見得スカラ座どよめく星月夜　紀久男（五・灯・天）
秋暮れて己の余命推し計る　恭延（猛・龍・隆）
☆藪の中姿見えねど金木犀　忠彦（万・恭・隆）
（☆→木犀の花こそ見えね藪香る）
☆丹誠の菊の溢るる花時計　健介（万・龍・青）
（☆→丹精の菊を高盛り花時計）
☆骨太の骨を拾へば暮るる秋　恵洲（万・灯・正）
（☆→骨太の骨拾ひつつ秋暮るる）
（正…中七→「骨の軽るさや」では？）

稲荷社の狐も留守か神無月　恵洲（恭・彦・青）

☆揖斐長良木曽越え行けば秋深む　堂哉（万・忠・五）
（☆→揖斐長良木曽三川を越ゆる秋）

☆ＳＬは汽笛残して花野去り　ゆたか（万・堅・恭）
（☆→ＳＬの汽笛の余韻大花野）（和夫さんを悼む）

飯よりもスマホ好きな子秋燈下　仝（龍・青・く）

☆木犀の香りや亡母の背の記憶　そらお（万・ゆ）
（☆→木犀の香や亡き母の背の記憶）

二点

秋日濃しビル屏風背に浜離宮　猛（敏・灯）

蕎麦に酒鬼平のごとこりやうめぇ　忠彦（堅・敏）

家二軒たうもろこしを高く干し　五郎太（灯・天）

上弦か下弦か月の客送る　弘子（く・青）
「義経千本桜」

☆別れとて子役振り向く秋狂言　仝（万・紀）

ふるさとや佇み見入る秋の波　ゆたか（堅・隆）

☆鳥渡る故友に似たる羅漢笑む　一灯（万・天）
（☆→冬紅葉故友に似たる羅漢笑み）（天…清さんのことなら「故友」→「清」にしたら？）

人生の塗り絵の数々秋の雲　正明（紀・孤）

☆満月や結婚記念クルージング　昇（万・弘）
（☆…三段切れを避ける為に「の」を入れたい）

溺愛さる孫も挨拶秋葬儀　天牛（紀・三）
（亡き辰之助の姉）

☆嗚呼旨しあとひき茄子とは良き名なり　仝（万・紀）
（☆→この旨さ後引き茄子とは宜々し）

☆颱風来（く）楽しき出会ひ皆反古に　仝（万・猛）
（☆→待望の出会ひ皆反古颱風来）

☆結願の日より十年花野道　盛雄（万・紀）

手入れせぬ健気な菊を好い位置に　紀久男（忠）

一点

弦楽の明哀絡む秋舞台　猛（紀）
（社友会初のコンサート）

衣更へ香味豚出す小諸そば　仝（天）

異常気象爪痕残し秋終る　恭延（く）

空高し満腔充たす深呼吸　仝（ゆ）

太刀魚や二匹でチャンバラ桶の中　忠彦（恭）

☆新米と孫とが来たり雨の夜　五郎太（万）
（☆→新米と孫が到着またも夜雨）

☆色葉散る富士講泊めし御師（おし）の家　仝（万）
（☆→紅葉かつ散る富士講の御師の宿）

☆独り寝の島宿霧笛呼ぶ如く　ゆたか（万）
（☆→独り寝へ霧笛の咽ぶ島の宿）

隣より落ちし銀杏拾ひけり　仝（正）

登高や板チョコ分ち小休止　一灯（弘）

秋うらら思はず一人家を出づ　規雄（紀）

●次回青葉会

十一月二十八日（木）午后六時～九時　（丸紅　談話室）

▲当季雑詠五句　投句二句

十二月十一日（水）鈴本演芸場（昼の部）→年忘れ句会（丸紅）

正月五日（日）新橋演舞場（昼の部）…吉例初芝居見物

一月二十三日（木）初句会（丸紅・談話室）

以上　文責　紀久男

平成二十五年十月句会報

一　今回は万里子先生、弘子さんが「萬緑」全国大会（下関）に出られる為、欠席。わずか8名の出席。投句は9名。紙上選句は先生以下13名（今迄最多！）となりました。

亡くなられた清さん、和夫さんを偲び乍ら先生からの絵葉書（台風見舞いと欠席されること）、規雄さんからの葉書（奥様追悼四句…後述）、「萬緑」10月号抜粋（合評等）、「一木会」案内状（淡彩スケッチ展）等を回覧。小生持参の「越州」（「久保田」千寿と同じ朝日酒造）、台湾のパイナップルケーキ「鳳梨酥」（台中の俊美）、五郎太さん持参のゴーフレット（山形のラ・フランス使用）を賞味しつつビールや酒、つまみや料理を鱈腹。猛さんの好リードで早や目に終了。

天牛さんの中世フランス語やラテン語、五郎太さんの酒米談義等で話は尽きませんでした。御覧のように五郎太さん、一灯さん、堂哉さん、天牛さんが高得点でした。紙上選句で先生が沢山（いつもの倍以上）選ばれ、その殆どを添削して下さいました。本当に見違えるような句となり見事な添削で勉強になります。酒にかまけて、さっぱり上達しない小生なんぞ只々恥入るばかりです。

二　関係者近詠

締切日浮雲越しに雷迫り　万里子
小蠅打つ蠅も命は唯一つ　〃
キャンプの夜世界遺産の報に湧き　〃
借り畑の初生り西瓜抱へ喜寿　〃
麦湯飲ませ二日の里親始まりぬ　眞希子
残る蝉公衆電話捜しあぐね　〃
目抜き通りに閉店続き赤とんぼ　〃
蛇と人どちらも動悸治まらず　弘子
そびらより風吹き変はる盂蘭盆会　〃
鳩すでに疎まれ八月十五日　〃
外出避くる他になにになし風炎ゆる　恭延
家出猫見つかりし報朝涼し　忠彦
解体のねぶた哀れや首残す　〃
里帰り付合ひ参る墓五つ　〃

海老蔵のコクーン歌舞伎

秋暑しカーテンコールお手盛で　紀久男
「吉兆」の弁当使ふ夏座敷　〃

―「萬緑」11月号―

隣家に来客の声夕端居　丹野敦雄

―『俳句』11月号　星野高士選

三　グリークの自然と愛妻への感謝に溢れた曲集「叙情小曲集」を聞きながら…。（前書きです）

はや九年妻の命日爽やかに　規雄
一人佇つ妻の墓前や秋麗ら　〃

四　七代目古今亭志ん馬急逝。10月7日。胃癌で、55歳！

8日の朝刊にびっくり仰天していた所へ御内儀の恵美さんからTEL。お慰めの言葉も出ませんでした。御葬儀での喪主（恵美さん）挨拶によると8月、新潟や四国の御贔屓に招ばれ独演会したのが最後の高座だったようです。今秋の芸術祭賞を獲ると稽古に熱こもっておった由。まだこれから、成熟を期待される噺家…、しかも師匠ゆずりの志ん朝ばりのべらんめい口調…立板に水の江戸弁は他の追随を許さない独擅場で惜しまれます。恵美さんが師匠と結婚前、丸紅スチールに勤務していた関係から、肩入れして会員各位を彼の高座に動員した次第。御後援有難うございました。

啖呵よき「大工調べ」や十三夜　弘子
寂しさを重ね募らせ十月尽　〃
時そばや江戸の噺家志ん馬逝く　忠彦
天高し高座布団のへこみかな　彦十

あとは待つ巌流島の女郎蜘蛛　弘子
決闘はせねば生きねば新松子　〃

―萬緑全国大会　横澤放川選

累々と明るき夜の鰯雲　允章
秋の蚊の幽き声や五合庵　〃
畳はる信濃の山や花薄　〃

―　新潟・長野吟行（一茶・良寛を訪ねて）

夜明星よりひとすぢの蜘蛛の糸　孤舟
遠嶺より雷神をとこ磨かねば　〃
ネクタイを外しなさいよ四十雀　〃

―『爽樹』11月号

灯を消せば月文机（ふづくえ）に届きをり　恵洲
小鳥来る庭を馳走といふ誘ひ　〃
孫自慢聞かされてゐて秋暑し　〃

―　大鉄会10月18日

別荘の男料理に新走り　堂哉
湧く湯の音せせらぎの音虫時雨　〃
名店の饅頭うまし秋の雨　小歌糸
居酒屋の嬌声にもなれ若がえる　〃

亡き妻につながる思ひ秋の空　規雄
亡妻の呼ぶ声頻り虫時雨　〃

もう聞けぬ江戸前高座秋ともし　紀久男
べら棒奴！師匠を返せ死神よ　〃
冥土寄席一門揃ふ月見酒　〃
通夜帰り売れっ子と飲む温め酒　〃

（歌之介と）

以上

紀久男記